

本研究は、倉橋由美子（一九三五-二〇〇五）、柳美里（一九六八）、角田光代（一九六七）、三人の女性作家の文学を分析対象として、テキストにおける父の娘に対する欲望と暴力と、それへの抵抗を考察するものである。一九七〇年代から二〇〇〇年代にかけて、日本では父の不在と母の支配が表裏一体であるとして注目を浴び、日本文学研究においてもそれが一つのパラダイムとなった。その結果、従来日本文学における母娘関係が幅広く研究されてきたのに対して、父娘関係というテーマが考察されず、あるいは過度に単純化され、見逃されてきてしまったのである。というのは、母娘関係と比べると、父の抑圧が簡単に批判できるものとして見做されてきたからである。このような父娘関係の捉え方によって、父の娘に対する欲望とそれに応えるような立場に強制される娘の状況が看過されてきたことに注意を払う必要がある。本研究では、その論理的枠組みを踏まえることで、倉橋由美子、柳美里、角田光代、三人の女性作家を中心に日本近現代文学の新たな側面を照らし出し、父の欲望と暴力から娘が逃れる（不）可能性について論じた。

「第一部 父娘の殺し愛い——倉橋由美子文学における父娘物語」では、倉橋由美子文学を中心にマスター・ナラティブの書き替えとして『聖少女』『長い夢路』『河口に死す』『向日葵の家』『神神がいたころの話』という五作品について考察し、テキストにおける戦後の少女小説、古代ギリシャの神話と悲劇のパロディを分析した。作中に表象された近親愛の意味を探りながら、父の欲望がどのような形で現れるか、またその欲望に対して娘たちがいかに応えるかという問題に取り組んだ。

「第二部 父の拘束／娘の解放——柳美里文学を中心として」では、柳美里文学を中心に作家が作り上げたフィクションと作家の人生を照らし合わせながら、作中の登場人物のみならず作家である柳自身が、文学を通じて父の暴力や父の支配から逃れる可能性を検証した。「フルハウス」『水辺のゆりかご』『ファミリー・シークレット』の分析によって、書くことがいかにして父の暴力の反復から解放される可能性を開くのかを考察した。また、『雨と夢のあとに』『月へのぼったケンタロウくん』『黒』に焦点を絞り、「柳美里文学の父」とされている東由多加の存在について考察し、父・東の言葉がいかにしての娘・柳の人生を支配してきたのか、そして柳が書くことによっていかにして父に尽くす娘の役割から降りえたかについて論じた。

「第三部 角田光代文学が提示する新たな父娘関係」では、角田光代の作品群を中心に日本の現代女性文学における父の支配について論じた。「ゆうべの神様」と「父のボール」の分析によって、父の暴力および父娘間の葛藤について考察した。また、『ぼくはきみのおにいさん』と『キッドナップ・ツアー』に焦点を絞ることで、角田文学におけるヘゲモニックな男性性の規範を克服する可能性を明らかにした。そして、『空中庭園』に所収された作品群の中の、とりわけ「チョコロQ」と「鍵つきドア」、また短編小説「父とガムと彼女」を取り上げ、家族愛の虚構性の視点から父娘間における嫌悪感について論じた。そうすることで、角田文学における新たな父親像および父娘関係の可能性が示唆されていると結論づけた。

以上のように、本研究では、時代背景や文学へのアプローチが異なる三人の女性作家の作品を分析対象とすることで、日本文学に潜む父による娘の欲望および父娘関係の支配構造と、その支配から逃れようとする娘の闘争の様相を浮かび上がらせた。